

Chapter 14 – Five-Year Interim Report of Thyroid Ultrasound Examinations  
in the Fukushima Health Management Survey

第 14 章 福島県民健康調査「甲状腺検査」5 年間の中間報告

大津留晶

福島県立医科大学

著者

大津留晶<sup>1</sup>、緑川早苗<sup>1</sup>、鈴木悟<sup>1</sup>、志村浩己<sup>1</sup>、松塚崇<sup>1</sup>、山下俊一<sup>2</sup>

1 福島県立医科大学、2 国立大学法人長崎大学

要約

福島県・県民健康調査の甲状腺検査において、超音波スクリーニングにより、甲状腺がんが数多く発見されていることと放射線被ばくとの関連は、いくつかの観点から非常に考えにくいとされています。例えば、推定されている線量が非常に低いこと、事故からの期間が短いこと、甲状腺がん患者の年齢分布、地理的分布、遺伝子変異のパターン、病理学的所見の特徴などからです。これらからは5年間におけるスクリーニング効果に起因する過剰診断の可能性が示唆されます。

個人レベルにおいても公衆衛生学的次元においても、スクリーニングのメリットが大きくなる可能性のある集団を特定するためには、最も大きな影響を受けたと考えられる方々の個別の甲状腺等価線量評価が可能となる必要があります。しかしたとえ最も大きな影響を受けたと考えられる人々の等価線量推計が可能となったとしても、スクリーニングのメリットは実際には相対的に小さいと想定されます。それは甲状腺がんの予後が良好であるため早期発見のメリットを受けられる人の割合が多くないと予想されることに加え、心理社会的影響は生涯残ると考えられるからです。

過剰診断のリスクを減らすためには、それらを包括的に考慮してスクリーニングにおける各種基準を熟慮する必要がありますと思われる。

掲載情報

「Thyroid Cancer and Nuclear Accidents: Long-term Aftereffects of Chernobyl and Fukushima」 (2017)

---

Akira Ohtsuru, Sanae Midorikawa, Satoru Suzuki, Hiroki Shimura, Takashi Matsuzuka, Shunichi Yamashita.

Thyroid Cancer and Nuclear Accidents Long-term Affects of Chernobyl and Fukushima. 2017; 145-153.